慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	竹村豊太郎著 経済生活の原理
Sub Title	
Author	山田, 正夫
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.11 (1928. 11) ,p.1646(154)- 1648(156)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19281101-0154

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

竹村豐太郎著「經濟生活の原理」

山田正夫

『經濟生活とは人間がその生存を保持發展する爲に物質的手段獲得を目的として一定期間繼續的に行ふ計畫的生活である。』（三〇）『經濟生活は價格を中心として行はれ發展するが故に、その全過程は價格の增減を以て云ひ表はすことが出來る。經濟生活は亦正確なる價格生活である。』（一七九）成程人は使用價値で生活する。』が使用價値を豐富に獲得する爲には交換價値に依らねばならぬ。而も『今日實際には價格を外にして交換價値なるものはない。』のであつて、著者が經濟學を以て價格の學と稱する Todd に讃する所以も亦茲に存する。（一七四―一七七）

價格決定の理論に對する著者の態度は限界効用及び費用の理を採ると共に、貨幣數量說に依つて補正せらるべきことを主張するのであるが、一旦此の價格理論が確立した上は、利潤勞銀地代利子等は何れも皆その適用に依つて決せられる特殊價格と觀ることが出來る。何となれば、『勤勞所得は勤勞に對して支拂はれる。即ちそれの賣値である。財産所得は財産の使用利益に對して支拂はれる』（四二三）ものであるから、利子地代即ち一般に『賃子は資本（土地を含む）利用の價格である。』（五〇三）而して又『利潤は企業による獲得價格と生産費とが決定して後に間接に決定する複合契約所得で』あつて、その獲得價格と生産費との決定には何れも價格の理論が行はれる（四五五―四五六）からである。『即ち各の所得の源泉には刻々に効用あり費用あり、又限界効用あり、限界費用あり、更に其時に一定量通貨の流通があつて所得が決定される。』（四二四）のである。

斯くて本書は一般的價格理論を說く第二篇を中心とし、第三編に入つて特殊價格たる所得價格論を展開し來る一方、第一編は之を經濟生活論と名づけて經濟生活の本質、背景、素材並びに價格の標準財たる貨幣及び信用等の解說に充て、之に經濟學研究の必要を記述せる簡單なる序編を冠して總て四編より成る。

更に又『經濟學は科學として、一定の條件の下に於ける一定の原因が一定の結果を生むことを記述する』（九）ものであつて、そは『實に經濟或は經濟生活の中に起生する諸事實の性質關係を敍述し說明する一の社會科學である。』（二一）となす著者は、『今日の經濟學が正統派經濟學者の自然科學的粧裝を全く脫せざるものと見』（序）て、或は、欲望は本來一の心理現象に過ぎず、只『其の滿足が物質的方法によつて遂げられるもの』に限り時に經濟生活の端緒となりこれが素材となる（一三五）と說明し、或は、『收獲遞減の自然法則は經濟のない所に行はれ、人はこの作用から免れて生活を豐富ならしめんが爲に經濟を考へる。……吾人は收穫遞減の法則乃至收益遞減の一般的法則を經濟法則としては排斥する。』（三七九―三八〇）と主張し、或は、土地と資本との區別は物理的認識と經濟的認識とを混同せるものとして其の不要なることを立證する等、（四九五―四九七）專ら自然科學的要素の排除に努めて居る。

本書の特色は大凡以上の諸點に見ることが出來るが、之等の特色を紹介する以上に私は著者の所論に對して評論を加へる必要はないと思ふ。何となれば此等個々の理論こそは混沌たる現代の純理經濟學上に於いて未だに解決を見るに至らぬ最も困難な問題であるからであるが、それにしても猶ほ著者の見解には一層の徹底を要求すべき餘地が、理論上にも體系上にも往々散見する樣に思はれる。就中著者が最も意を注いだと察せられる非經濟學的要素の排除にしても、例へば經濟本則に就

いて著者は『これは必ずしも經濟生活に於ける行爲の本則に限らない。』ことを認めてゐるにも係らず、『經濟本則は經濟生活に於て最も明に有効に作用する。……經濟本則を其のまゝの名稱で稱びつゞけることは、それの過去の久しい閲歴以上の理由ありと考へることが出來る。』（一七―一八）となすが如き、或は欲望を經濟生活の素材の中心に置かれる『財を財たらしめる心理的一要素』（一三四）と認めつゝ、『經濟生活は欲望にはじまつてその滿足に終る。』（一三五）ものとして說き來る欲望論乃至價値論の如きは、本書に依つて十分に窺知することの出來ない著者の方法論上の見解と共に不審の點を殘し、更に又收益遞減の法則は之を斷然斥け去るとはいへ、その半面たる費用遞增の法則の性質を全然不問に附したるは、之を『經濟的考察の目的となる心理法則』たる効用遞減の法則に對立せしむる以上猶ほ攻究に價すべきものではあるまいか。

寔に著者が本書に於いて企てた所は、傳統的觀念を全然脱出することが出來なかつたと同時に新機軸に徹底することも亦不可能に終つたものと云ふべく、而も本書存在の理由たるや又實に此の點に於て多少の暗示を經濟學上に齎らしたるの一事に發見することが出來よう。只『本書は初學者の爲の經濟學入門の書である。』（序）が故に、之に依つて著者の深奥なる見解の全てを忖度することは許されぬであらう、單に『經濟學入門の書』と見る時、徒らに抽象的言辭のみを弄せず、須要なる經濟上の知識を洩らすことなく按配して懇切平明なる記述を惜しまざりし點、正に數多き經濟原論の著述中最も好ましいものゝ一として推すに憚なく、殊に價格理論の解說は初學者の理解を助くること少くあるまい。惜むらくは術語に併記せられてゐる外國語（英獨佛）が統一を欠き、又殆と全く參考書を擧げてゐない樣な缺陷を免れなかつたが、殊に後者の如きは啻に初學者に對して不忠なるのみに止まるまいと思ふ。（菊版五三〇頁四圓三十錢昭和三年六月東京啓明社發行）

十月號正誤表

		誤	正
八九頁	十二行目	素材無視	素材重視
一七六頁	十二―十三行目	に於て、不要を說き、に於て、價値論の經濟學を	に於て價値論の不要を說き、經濟學を
一七八頁	十三行目	リカドオ	リカアドオ
一八〇頁	十一行目	P. Wietzel	H. Dietzel
一八四頁	二行目	オフユリミテ	オフヰリミテ
一八五頁	十三行目	q_{1a}. q_{1b}. q_{1c}.	q_{1a}. q_{1b}. q_{1c}.
二〇〇頁	三行目	より獨立 ra にゝ變ずる	より獨立に ra を變ずる
二〇六頁	九行目	反復的なるである。	反復的なる行動である。
二〇九頁	十五行目	二瓩パン	二瓩のパン
二一一頁	四行目	指數は　より〃へ	指數はいより〃へ
二一八頁	六行目	R. Courtiu	R. Courtin